雪ノ下陽乃の受難

クトウテン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「八幡――比企谷君の性欲が凄すぎて身体がもたないの、どうしたらいいと思う？」

それは、一つの相談から始まった。

目次

雪ノ下雪乃の相談
姉、妹から相談を受ける　1
姉、闇を感じる。　10
由比ヶ浜結衣の告白
姉、妹の友人の狂気を知る。　18
一色いろはの妄想
姉、母校に向かう。　26
姉、生徒会長と対峙する。　29
姉、奉仕部に向かう。　34
比企谷小町の苦悩
姉、義妹の愚痴を聞く。　39
■■■■■の日記　44

雪ノ下雪乃の相談
姉、妹から相談を受ける

「で、どういう催しなのかなこれは」

そこは雪ノ下陽乃が住まう高級マンションの一角。
珍しい客の突然の訪問に驚きを隠せず、そんな声を漏らすと目の前のソファーに座る訪問者我が最愛の妹でもある彼女――雪ノ下雪乃は、どこか覚悟を決めたような口調で言った。

「相談があるの――姉さん」

あまりの事態だ。
そして、なんらかのイレギュラーが起きている。
自分の家の中でこれから起きるであろう波乱の予感を感じる。
妹に頼ってもらったという事実にじんわりと歓喜を覚えながら、それを悟られないように、
出来る姉であるように、そして彼女にとってまだ超えられぬ姉であれるように。
余裕ぶって陽乃は言葉をつづけた。

「ふうん、雪乃ちゃんがそんなこと言うなんて本当に珍しい。いいわよ、お姉ちゃんが何でも聞いてあげる」

その言葉に、雪乃はふわりと柔和な笑みを浮かべた。
彼――比企谷八幡と付き合う前までには絶対に見られない表情だった。
あぁ、可愛い。そして同時に強い嫉妬を覚える。
可愛い妹を、もっと可愛くしてしまったあの男に。

よし、お姉ちゃんとしていいところを見せて、比企谷君に嫉妬させてやろう。
我ながら幼稚な衝動に身を任せて言い放った言葉に対して、妹は全来の信頼を寄せるように、口を開いた。
「八幡――比企谷君の性欲が凄すぎて身体がもたないの、どうしたらいいと思う？」
その言葉を聞いた瞬間、私は人生で初めて脳みそがフリーズする感覚を味わった。

◆

性欲？　身体持たない？　すごい？　すごいって何が？　パオンの事？　あのパオンの事？
リブートした脳みそがかつてない速度で空回りをする。第三宇宙速度の空回りだった。
「ねえさん？」
「……」
「あの、ねえさん？」
「……何かな雪乃ちゃん。えぇと、なんだっけ、パオンの話？」
「ぱおん？」
「なんでもないわ忘れて。それで、なんだっけ。えぇと、性欲、がすごい、の……彼が……？」
というか、なに？
あの男、高校生の癖にウチの天使に手を出したの？　は？
クソやろうかよ。何が理性の化け物だよ。性欲の化け物じゃねぇか。…すぞサルが……。

「責任とれるの？　ウチの天使を襲って？　結婚もまだなのに？　はは、●そうかなぁ……」

空回りしていた歯車が突如がっちりとかみ合って、脳内で殺害計画を組み立て始める。

呼び出し……東京湾……コンクリ……。

ダークサイドに落ちかけた姉の雰囲気を悟ったのか、ソファから立ち上がった雪乃が陽乃の手を取る。

「待って姉さん！　か、彼は襲ってないの！　違うわ、そうじゃないのよ……むしろ……その、私から……」

顔を真っ赤にさせて、もじもじと膝をすり合わせるようにしてうつむきがちに言う妹の顔。

姉というフィルター無しに言おう。

完全にメスの顔をしていた。

「ああああああああああああああああああああああああ!!!!!」

「ねえさん!?」

突如ソファーのクッションに顔をうずめて叫びだした姉の奇行を目の当たりにした妹はＳＡＮチェックです。

とはいえその状況を収められる人間は残念ながらおらず、混沌とした空間はそのまま続行される。

「脳が！　脳が破壊されるわ！　妹が雌落ちした話とか！　何!?　スタンド攻撃!?　助けて静ちゃん！」

「待って姉さん！　メス落ちという表現はやめてくれるかしら！」

「だってそうじゃんうわあああ比企谷君に妹寝取られたぁあああ

ああ!!」
「ねえさん!?」

今までの余裕が簡単に蒸発した姉の姿に流石の雪乃も困惑を浮かべ、そこから場が落ち着くまで実に３０分の時間を浪費した。

◆

「はぁ、はぁ……ごめんね雪乃ちゃん。ちょっと朝の１０時から聞くレベルの話題じゃなくてさすがの私もちょっと取り乱しちゃったみたい……」
「いえ、ごめんなさい姉さん。私も次からは気を付けるわ……夜の１時くらいにするわね」
「時間帯が生々しいなぁ!!?」

それさぁ、確実に話してる途中に比企谷君の寝息とか聞こえてくる奴じゃん。
なんかもうちょっとない？　その、２０時くらいのそういう話題でもおかしくないなぁみたいな時間。
いやほんとうにふざけんな。次あった時顔合わせられないでしょ。

その声に、弱弱しい声で雪乃が言った。

「だって彼一回始めたら数時間ぶっ通しでするんだもの……」

再び凍る空気。
緩和しかけた空気が引き締まるのを、陽乃は肌で感じた。

「ぶ、ぶっ通しって言うと、どれくらい？」

陽乃もそういう話を全く聞かないわけではない。
中にはスローペースで行う人たちもいる事は知っており、時間としても2～3時間くらいかけてゆっくり行う人も中には全然いる。

そうだ、当然ウチで育てられた雪乃ちゃんはそういう俗的な性部分の知識などは薄いだろうし、比企谷君もなんだかんだと初心なところが強いのは見ていてわかる。

つまりその二時間程度のアレソレが異常じゃないかどうかが不安なのだ。
行為はどうあれ、その疑念自体はお子様同然。それならばこの姉が自信をもって――。

「えぇと、19時から初めて、この前は朝6時まで……」
「ドがつく異常だよ!!」
「えぇ?」

恐ろしい。私は今初めて比企谷八幡という生物に恐怖を感じていた。
は？　19時から6時？　11時間？　ぶっ通しで？　それはもう人間ではないのでは？

「あ、でも流石に途中途中休憩とかがあるわけだよね……？」

そう聞くと、最愛の妹はきょとんとした顔で首を傾げた。

「ねえさん？」
「なあに雪乃ちゃん」
「バカにしないでほしいわ。流石にぶっ通しって言葉の意味くらい、間違えないのだから」

そこは間違っていてほしかったなぁ……。
淡い希望は飴細工のように容易く砕け散った。
残ったのは残酷な現実だった。

「というかなに？　それは、どうなってるの？　その、行為中に比企谷君は何度達されていらっしゃるの？」

大分頭も混乱しているようで口調のバグが自分でも認識できた。
でもここまでくると止まることはもはや不可能。
妹を思う気持ちと、野次馬根性がミキシングされたおおよそ考えうる限り最悪の状態での暴走機関車陽乃が爆誕した瞬間だった。

「そのゴムを、２……」
「２個⁉　１１時間で⁉」

とんだ遅漏野郎ね比企谷君は！　ペッ!!!　ふぁっきゅー！

もはや男性的なアラが見つかるだけで陽乃は嬉しかった。
砂漠の中に見つけたオアシスに駆け寄るように、陽乃は内心あらん限りの力で罵った。

「――ダースほど」
「だーすぅ⁉」

は⁉　じゃあ１２が二つで……２４⁉　それはもう環境破壊じゃん⁉（状態異常：混乱）
沸騰しきった脳みそがまともな回答を導けない。

「それを雪乃ちゃんはどうしてるの⁉　壊れない⁉」

あまりに現実味の無い言葉の数々にそう聞くと、彼女は言った。
「あぁ、そう。それをね、経験豊富な姉さんに聞いてみようと思って……」
その言葉に、陽乃はここにきてようやく事の重大さを知った。
これは――相談なんて、生易しいものではない。
今ここにあるのは、いつ爆発するのかもわからず、そして奇怪に入り組んだ配線の時限爆弾と、それを前に取り残された、哀れな一般人でしかないことを、ようやく理解した。
なるほど。なるほど。なるほど？
「でもその様子を見るに、やはり姉さんでもこれは解決しきれない問題の様ね……ごめんなさい。変な事を聞いてしまって」
そう言って彼女は、悪意はないのであろう。
しかし期待を裏切られたものへとむけるように、小さく、しかし確かに嘆息を漏らした。
それを見た陽乃は――立ち上がった。
そのままマンションのリビングに備え付けられた大きな窓に身体ごと視線を向けた。
丁度雪乃に背を向ける形だった。
「姉さん？　どうしたの？」
その声に陽乃は答えられない。

正直に言おう。
陽乃は処女である。
それも生粋の処女である。
陽乃に性の事は分からぬ。
ただ安易に体を許すことはならぬという人一倍の貞操観念と、
身体を狙う不埒者から感じる下劣な視線や感情には人一倍敏感であった。

だから今、そちらの事情だけで言えば、陽乃は既に妹に大きく後れを取っていた。
ごまかしようがないほど、歴然の差であった。

しかし、しかしだ。

姉たるもの、本当にこのまま引き下がってもいいのであろうか？
姉とは常に妹にとっての壁となり、目標となり、そして尊敬されるべき対象として、
妹の前に立つものではないのだろうか。

その姉が、妹のこの困窮した事態に、何の力にもなれないなどあって許されるのだろうか。

――否、断じて、否だ。

陽乃は拳を固く握り空を見た。
高層階マンションの一角から覗くことのできる広大な空。
蒼穹広がる空に浮かぶ、純白の雲。
そしてそれらすべてを照らすのは――大きく一つだけ浮かぶ太陽。

――ああ、そうだ。私は、この子にとっての太陽になりたいんだった。

ふ、と口が自然と弓を描く。
陽乃の顔に、先ほどまでの色はなく、そこにいたのは一人の覚悟をキメた女。
もう陽乃に、迷いなどなかった。

振り返れば、そこにいるのは最愛の妹。
私が守るべき存在にして――今この場においては、最大の敵ともいえる存在。

さぁ、やりましょう。
姉の尊厳を掛けた、空前絶後の、話し合いを――。

「安心して雪乃ちゃん。この経験豊富(※当社比)なお姉ちゃんにかかれば、あなたの悩みなんてちょちょいのちょいよ」

ただの耳年増が、攻勢に出る――！

姉、闇を感じる。

あ～やっちゃったよこれ。
どうするの？　経験豊富？　なんの？
振った経験位しか誇れるものないんだけど……。
早くも後悔の波が津波となって陽乃の防波堤（メンタル）を打ち付けていた。
しかし目の前の妹から寄せられてるキラキラとした尊敬の念には代えられない。
いや嬉しいけどね？
嬉しいけど、妹からの小学生ぶりのこんなキラキラした視線がさぁ……彼氏とのシモの話題で出てくるとかおかしいよね？　気が狂いそう。

「姉さん……！　流石姉さんね！　大学ではヤリまくりな姉さん流石！」
「うん、ありがとう雪乃ちゃん。多分褒めてくれてるんだよね？　でもちょっと黙ろっか？」

人生で初めて妹に向かって手が出そうになった瞬間だった。

「それで、どうすればいいかしら」
「そうだね。いくつか方法はあると思うよ」

言いながら、候補を絞り出していく。

「まず順当なのが、比企谷君自身にセッ……おセッセの相談をして、回数、時間を減らしてもらうこと。それはどう？」
「それは……そうね。きっと彼の事だから、相談すれば言ったとおりにしてくれると思うのだけれど……」
「けれど？」

続きを促すと、妹はその顔をじわじわと朱色に変えながら、ポショポショと消えそうな声で語りだす。

「その……彼には、我慢をしてほしくないというか、ありのままでいてほしくて……出来るなら、こういう所くらいは満足させてあげたいの……」

「……」

はるの　の　やる気が　がくっと　下がった。

頭の中で聞こえたそんなアナウンスはきっと間違いじゃない。

ええ？　なに、もしかしてこれ、自虐風自慢ってやつ？

ウチの妹が昏い喜びを見出し始めてる……？

流石に自覚ありで言ってるわけじゃないだろうが、なんだろうこの内臓を抉る様なダメージは。

とはいえそういう結論が出てるなら根性入れて頑張れや、程度しか言うことはないのだが……。

陽乃はその返答を受けてニコッと笑った。

「……そっか。なら、別の方法がいいね？」

悲しいことに、陽乃は姉バカという種族の生き物だった。

内容はどうあれ妹の一生懸命な姿に胸を打たれ、返す言葉は人工甘味料並の糖度をもって返される。

勿論やるせない気持ちが無いわけではない。

しかしその気持ちはしっかり比企谷八幡への負債として陽乃の中で貯蓄されているため問題はなかった。

「じゃあ、そうだね……雪乃ちゃんが疲れない方法で満足させてあげるのはどうかな？」

「突かれない方法……」

「う～んニュアンスがなぁ……！」

間違ってないけど、昼の11時にその深夜番組みたいなテンションやめてくれない？
妹が良くない方向に変わりつつあることを認識して、これもあとでしっかり憎らしいアンチクショウへのクレームとして、心のノートに書き加えた。
ともかく、と仕切りなおす。

「まぁその、具体的に言えば手淫、口淫と呼ばれる行為なんだけど……そう言うのってどうなの？　し、したの？」

いやもうこれほぼそっち系のインタビューシーンみたくなってるじゃん。
私もなにが悲しくて妹の性事情を事細かに聞かなきゃいけないのだろうか。

しかし我が家のポンコツ天使はその問いかけに違和感も抱かずに、思い出したのか相変わらず頬を染めて言った。

「ひ、一通りは……まぁ、えぇ……そう言う技術も必要かと思って修めたわ……」
「そっかぁ……ちなみに、その、どう？　その、サイズ的なのは……」
「さ、サイズ……!?　そ、そんなの……っ」

恥ずかしがる妹の姿にハッとする。いや、まずいだろ。
妹の彼氏のパオンのサイズを聞き出すのはやばい。分かったからなんなんだ。
あわてて舵を取り直すように手を振ってごまかす。ちょっと淫猥な空気に当てられすぎた。

「じょ、冗談に決まってるじゃんも～！　びっくりしたなあ答えられ

ても困るんだから～！」
「そ、そうよね！　ね、姉さんもびっくりすること言わないでくれないかしら……っ！」

ははは……、空々しい空笑いが机を挟んで木霊した。
そう言いながら、なぜか雪乃の視線はあらぬ方向を向いていた。
思わず晴乃がその視線を追うと、そこにあったのは食卓机の上に置かれた室内フレグランス用のスプレーボトル。
理解できない視線の動きに疑問符が浮かび上がり、その直後、自分の脳みそが恐ろしい答えを導く。
直接的に表現するのはためらっていた……？
だから何かに例えて伝えようとして、視線をさまよわせていた……？

だとすると――え？
二度見した。
やはりそこにあるのはスプレーボトル。
いや、まさか。それはいくら何でも。
あれ普通にペットボトルくらいのサイズ感あるよ？
えぇ～？　それはあれじゃん？　もうだめでしょ。三本目の足みたいになるじゃん。
そんな大魔王ゾーマみたいなもの宿してるの？　未来の義弟……。
もう顔見れないんだけど……。気を抜いたらゾーマって呼んじゃいそう……。

「と、ともかく！」

また仕切りなおすように大きな声を張る。

「話を戻すけど、実際どうなの？　その、手とか口とかで満足してくれないの……？」
「いえ、彼は多分、そうやっていえば満足してくれると思うのだけれど

……」
「……」
その煮え切らない言い方に陽乃は嫌な予感を感じ取った。
もう「けれど？」とは、聞けなかった。
「彼の、その……あ、浴びたり飲んだりしているうちに私が我慢できなくなってしまって……」
「――」
もう言葉もなかった。
浴びたり飲んだり？　その慣用句って実用できる類のモノだっけ？
ていうかもう言うけどさ、雪乃ちゃんじゃん？
なんとなくわかってたけど、これ悪いの雪乃ちゃんじゃん？
そんな火に油注いで火事起きてるのに、
「どうしたら火事が起きないですか」って油注ぐのをまず止めようよ!!!!
「その、雪乃ちゃん側で我慢することとかっていうのは……」
聞いてみると、彼女は突然気を悪くしたのか、眉を顰めていった。
「姉さんは由比ヶ浜さんと同じことを言うのね……」
「いやだってちょっとまってなにこの話ガハマちゃんにもしてるってことぉ?!?!」
「えぇ。私たちに隠し事はないから」
「……」
絶句した。
そんな、あまりにもひどすぎる。
驚きのあまりちいかわみたいなテンションで妹を問いただしてし

まった。
どうしようこの子。私の手に負えない。
そんな話を女友達にするなよとか、というか同じ男好きな相手に性事情語るなよとか、私が最初じゃないんかとか、色々一瞬で突っ込みが浮かんでは消えていく。そんな常識的な言葉は、既に彼女には届かないのだろう。
モンスターだ。雪ノ下で生まれ雪ノ下で育った純正のモンスター。
拗らせに次ぐ拗らせでいっそ真直ぐに見えるほどこじれてしまった悲しきモンスターが陽乃の目の前にいた。
怪物を見る目で妹を見ながら、念のための確認をする。

「その、ガハマちゃん大丈夫？」
「ええ、元気よ。親友の私が言うんだから間違いないわ」
「雪乃ちゃんの眼はいつの間にガラス玉になったのかな？」
「そんな、透き通る様だなんて」

無敵かよこの子。皮肉すら通じない。
いやんいやん身もだえる妹をよそにスマートフォンのＳＮＳで「ガハマちゃん」という名前をタップし、チャットルームを立ち上げる。

Ｈａｌ　１１：３２　おーいガハマちゃーん。急にごめんね。雪乃ちゃんのお姉ちゃんの陽乃だよ～。

？＊。ゆい？＊。　１１：３３　あ、はるのさん！　おはようございます！　どうしたんですか？（☒☒☒＊）

Ｈａｌ　１１：３３　どもども！　あのね、言いにくい事ならいいんだけど、最近ウチの妹とか迷惑かけてないかな？　主に比企谷君関連で！

？＊。ゆい？＊。　１１：３４　あ

？＊。ゆい？＊。　１１：３４　あの

？＊。ゆい？＊。　１１：３４　いや、大丈夫です

Ｈａｌ　１１：３５　ごめんねガハマちゃん。本当にごめんね。本当にごめんね

画面から目を放して天を仰いだ。

どう見てもアウトだった。あわや友情の崩壊の音すら聞こえるほどに。

すう、と息を吸って吐く。

そうしてから目の前の悲しきモンスターに向けて厳かに口を開いた。

姉として、これだけは言っておこうと、嫌われてもいい覚悟で言うのだ。

「雪乃ちゃん、もう二度とそれ関係の話をガハマちゃんにしたらダメだよ」

「それはできないわ」

その覚悟を決めた発言は剛速球で却下された。

「そんな即答ある!?　親友絶望の淵に叩き込む趣味でもあったの雪乃ちゃん!?」

「だって由比ヶ浜さんから……シた次の日はどんな風にしたか教えてほしいって言われてるんだもの……」

「おっとぉまた話が変わってきたぞぉ……」

凄いなー奉仕部。掘れば掘るほど地雷が見つかるじゃん。

というか私は何聞かされているの？　え？　ガハマちゃんはどういう神経してるの？

好きな人と親友の情事を聞くの？　ウソでしょ？　そこに何の生産性があるんですか……？

陽乃にはもう奉仕部が分からない。

今の所ギリギリ理解できているのが総武校がアレフガルドで比企谷君がゾーマな事だ。

雪乃の独白が続く。

「私も最初は酷かと思ったのだけど……今の話で悩んでるときに何でも言ってほしいって由比ヶ浜さんに詰め寄られて……話してしまったの。比企谷君との情事の話や、内容や、サイズや、回数……。それでも、由比ヶ浜さんは涙を浮かべながら、怒ってもいいのに顔を真っ赤に染めても怒らないで、全部聞いてくれたの。どんなに謝っても足りないわ……」

多分どんなに謝っても足りない相手は、勝手に股間のサイズを複数人に知られている比企谷君だと思う。

そしてガハマちゃんがその状態に陥っているのは間違いなく別の理由だろう。

しかし陽乃はそれを口にしなかった。これ以上奉仕部の闇に足を突っ込むのが怖かったからだ。

どんな顔をしていいかわからない。笑えばいいと思うよ。というあの名言すら今は白々しい。

私と同じ状況でもそのセリフが出てくるものか是非を問いたいところだった。

最初は憎しみしか浮かばなかったのに、こうして話を聞いていればどんどん憐みの念さえ覚えてくる。

不思議だった。今はとても、彼に『お疲れ』と一言いたわりの言葉を掛けたい気持ちだった……。

由比ヶ浜結衣の告白
姉、妹の友人の狂気を知る。

その後。
もう少し自分でも頑張ってみるわね。
また何かあったら相談に乗ってほしいわ。その、話してみると結構楽になった、ありがとう姉さん……。
などという可愛い妹のいじらしい言葉に調子乗って大見得を切ったその後。
結局の所、解決らしい解決はせずその相談は幕を閉じた。
それから2日。
陽乃は普段通りの日常を過ごしていた。
大学の講義をリモートで受けてはレポートを纏め、仲の良い（自分都合的に）友達とどうでもいい話をしながら過ごしていた日のことだった。
スマートフォンがブルリと誰かからの連絡を知らせる。
手慰みに通知を開けば、そこにある文字は――ガハマちゃんの文字だった。
珍しい連絡があるものだ。
そう思ってトークルームを開こうとした時、ピリと脳内をかすめる何かがあった。
それは所謂勘というやつで、さらに言うならば陽乃の勘というのは経験に基づいた直感的でいて理論的な気付きの為、馬鹿にならない予感の類だった。
平たく言おう――嫌な予感がする。
嫌な予感はする。予感はするがしかし、前回の妹の相談時、酷く迷惑をかけた相手だ。
あの時の居た堪れない気持ちほど強い感情もなかなか浮かべた記憶がない。
少しでも借りを返すつもりで、結局陽乃はトークルームを開くと、

そこには以下の文字。

？＊。ゆい？＊。：はるのさん。忙しいところにすみません。もしお時間あれば、ご相談したいことがあったんですが、どうでしょうか

その文字を見て、彼女にしては随分とかしこまった言葉だと苦笑を浮かべる。

そして理由がなければそうはならないだろうこともすぐに理解した。

そういえば彼女も受験生だ。

聞くところによると、どうやら奉仕部の三人は同じ大学を目指していると聞く。

比企谷君と雪乃ちゃんはともかく、彼女はとりわけ成績が悪いと聞く。この感じからしても、その話かもしれない。

よし、ここはお姉さんがひと肌脱いでやりますか。そんな心持ちで返信するため文章を入力する。

Ｈａｌ：めずらしいねガハマちゃん、どうしたの？

相談？　いいよ、今ちょうど暇だからもし

嫌じゃないならテレビ通話で話聞こうか？

返事は即座に来た。

？＊。ゆい？＊。：いいんですか!?　じゃあお願いしたいです！

こちらから今連絡してもいいですか!?

Ｈａｌ：はいはい、どうぞー

その言葉から1分も立たないうちに、スマートフォンと連動したＰＣ両方に届くテレビ通話の通知。

陽乃はソファーから身体を起こし、勉強用のデスクでＰＣからテレビ通話を開いた。

そこに現れた淡い橙の髪を伸ばした少女を見て、目を細める。
最後にあったのは……2ヶ月前だろうか。
2ヶ月なんて大した時間の流れでもないのに、彼女はあの頃よりさらに成長しているようで、前にはなかった大人っぽさを確かに感じた。
「久しぶりだね、ガハマちゃん。というより、ひゃっはろー、かな？」
『はい、お久しぶりです陽乃さん！　あ、やっはろーです！』
でもやっぱり前のまま、花咲くように画面越しで笑う彼女に安堵も覚えながら、陽乃は先を促した。
「それで？　早速だけどどんなお話があったのかな？　まぁ私に聞くようなことだから想像はつくけど、多分大体のことは教えられると思うから安心してよ」
『へ!?　本当ですか!?』
驚き、喜ぶ声を聞きながら、タンブラーに注いであるアイスティーに優雅に口をつける。
さて、どんな話題が飛び出すものか。
既にラスボス（雪乃ちゃん）の相談を乗り切った我が身に不足なし。
余裕綽々と耳を傾けた。
『じゃあ相談なんですが――最近ゆきのんから聞くヒッキーとのセックス報告で興奮しちゃうんですけどどうしたらいいと思いますか!?』
陽乃の口からアイスティーが飛び出した。

◆

「ごほっ、えほっ！　ぅ、鼻が、アイスティーの匂いが……っ！」
『陽乃さん!?　大丈夫ですか!?』
誰のせいじゃい！　とはイキリ散らかした挙句に言うことはできず、強がった陽乃は笑い声を上げる。
「あ、あはは！　大丈夫大丈夫！　というかガハマちゃん、ええと、それ、相談するの私でいいの？　なんで？」
流石に妹でも友達でもない人間から振られる話題のレベルは大き

く逸脱している。
いや、原因は薄々わかっていた。でも流石にそれはないよな？　そんな一縷の望みをかけた問いかけは、画面の向こうの笑顔に断ち切られた。
『はい！　ゆきのんからの紹介で、大学でヤリまくりのハメまくりだからアブノーマルな質問でも何でも大丈夫なんだから！　って教えてもらったって！』
「……おお」
なんとか絞り出しせたのはたったの２文字。
笑顔が剥がれ、多分、すごい顔になっていたと思う。
す……っと脳みそが冷えた。
いや、あのさ、ええ？
馬鹿でしょあの娘。
嘘だよね、姉のハメまくり発言をそんな友達に言う事なんてこの世界に存在するの？
というか私も何言ってんだ。
いや褒められて調子乗ったよねわかるよでも調子乗った結果ハメまくり発言は正気の沙汰ではないでしょ。
「えっとぉ……ちょっとまってねぇ」
いいながら、か細くスゥ――――と息を吸う。
どうしてこうなった？　私は今何を聞かされているんだ？
妹の友達から妹と妹の彼氏の性交の話を聞くのが興奮しちゃうって暴露話を聞かされている？
ダメだ、文章にしてみても全く脳みそに入ってこない。
今まともに彼女との会話に付き合える気はしないが、時すでに遅し。
大見得を切ったばかりに退路など存在しなかった…。
「が、ガハマちゃん。打ち明けてくれてありがとう。それでガハマちゃんは、大丈夫なの？　実は無理して聞いてるとか、そう言うわけではない……？」
人間不思議なもので、嫌なものでも精神的な防衛反応として、

辛い物でも勝手に脳がつらく感じないように誤反応させることなどザラにある。
多大なストレスの結果、プレッシャーの結果、そう言う症状に陥って結局は悪化するパターンなど陽乃も多数見てきた。
そう聞けば彼女は、思い辺りはあるのだろう。
少し悲し気に目を伏せながら、滔々と語りだす。
『はい……やっぱり、最初ヒッキーとゆきのんが、〝そういうこと〟をしてるって知った時は、ショックでした。すごい胸が苦しくて、悲しくて……』
「うん、そうだよね……」
『あぁ、私の大好きな親友と、大好きな人が、そう言う関係なんだなって実感したら、なんだかドキドキして……』
「うん……？」
『ゆきのんが誘ったら、強引にベッドに組み伏せられて、後ろから激しくいじめられて、泣いてもヒッキーが止めてくれなかった話とか、その後仕返しにゆきのんがヒッキーにまたがって、ヒッキーが出したのに止めないで腰を……』
「あ～まって、ガハマちゃん。ちょっとギア落とそう？　あのね、瞳孔開いてる」
ハァハァと荒い呼吸を繰り返しながら、妹とその彼氏の情事を事細かに語るその友達。
凄い構図だ。そして私は外部の外付けアタッチメント程度のはずなのに、完全にこの狂気の人間関係に巻き込まれようとしている。
ともかく結論は出た。
由比ヶ浜結衣――コイツは本物である。
手の施しようなどとっくのとうにない。
処置なしだ。
「あの、まぁ、ほら、性癖なんて人それぞれだしさ、いいんじゃないかな？　先天的にせよ後天的にせよ自分の一部なわけだから、適度に付き合っていくしかない訳で……。少なくとも誰も損してないわけだし、悪くないと思うよ」

自分でもなんて白々しいアドバイスなんだろうとは自覚していた。
しかし今の彼女に送れるのはこんな当たり前の言葉しかない。
もう私は疲れたよ。
だから早々とこの相談室も終わらせよう。
完全にクロージングに入ったトークに、結衣はそっか……と自分に言い聞かせるように声を返した。
そうしてから、数拍時間を置いて、どこか吹っ切れたように言った。
『ありがとうございます陽乃さん。そうですよね……そうですよね！
ありがとうございます！　この前寝てるヒッキーにキスしちゃったときも、ドアの向こうでゆきのんがずっとこっちを見てて、止めに入らないから見せつけるようにキスをしてたらゆきのんが足をガクガク震わせながらビシャビシャにしてたんです！　その後もわざと私とヒッキーが二人っきりになる様にしたり、戻ってくるのが遅かったり、何でか部室に入らないで覗いてたりしてたから……やっぱりそういう事なんですね！　ようやく悩みが解消――』
「まってまってまってまってまって」
聞こえてきた衝撃の事実の数々に脳みそが爆発した。
あ～～～頭が壊れちゃ～～う。
もう理解不能だよ。というか怖いよ。もれなく皆頭おかしいよ。
ウチの妹寝取られ属性持ってるの？　なんで相互にそんな需要満たしちゃってるの？
というか知らない間に比企谷君ガハマちゃんの餌食になってるの？　認知してるのそれは。
この混沌とした状況を比企谷君が知っているのか知らないのか、ただそれだけが心配だった。
彼が安穏とリア充生活を過ごすその水面下で親友同士でこんな愛憎入り混じってもおかしくない
アブノーマルな出来事が起きているといったい誰が信じられようか。
まるで薄氷を踏むようなバランスで成り立つ混沌とした事実の数々に戦慄を隠せない。

しかし完全に自分のアドバイスでテンションが振り切ってしまった彼女にはそんなことは関係なく。
『ありがとうございます陽乃さん！　わたし、わかりました！　ちゃんとゆきのんと相談して、今後どうするか、しっかり話し合いたいと思います！　ゆきのんがしてほしいなら、私なんだってやりますから！』
そこは止めろよ。完全にアウトロー寄りの思考なんだよ。
ウチの妹がもうすでにおかしい方向に向かってるのに助長させるなよ。
そんな希望もむなしく、『相談乗ってもらってありがとうございました！　さっそくゆきのんに連絡してみます！』と意気揚々とした声と共に通話は終わり、取り残された陽乃は静かに天を仰いだ。
沢山の感情と、たくさんの言葉が胸をよぎり、しかしそのどれもが明確に口にすることは叶わず、
ただ時間と共に過ぎていくばかり。
「ごめんね、比企谷君……私には無理だったよ……」
決して本人に届くことのない小さい言葉は、溶けて消えるように、無音の部屋に染み入った…。
後日談。
陽乃の元に、一通の画像とメッセージが届いた。
送り主は由比ヶ浜結衣。
「……」
まるで爆弾を操作するような手つきで、それを開く。
そこには
ゆい：ありがとうございました！　おかげで解決しました！
そんな文章と共に、添えられた画像は妹とその友達が笑顔で寄り添う姿。
感動的な光景だろう。悩みも問題も干渉しきったと言わんばかりの二人の笑顔はそれは輝くようだ。
しかし、目ざとい陽乃は見逃さなかった。
その画像の二人が、どこかとろんと、とろけるような、よりはっき

り言えば女を思わせる笑みをこぼしているのが。
そしてその画像の一部に見えた――力なく横たわる男子生徒に密着する姿を。
「……」
無言でヨシ！　と指をさす猫のスタンプを返し、陽乃はそっとメッセージを閉じた……。

一色いろはの妄想
姉、母校に向かう。

〝はるさん。今度、久々に総武高校に顔出ししませんか？〟
それは、そんな一言の軽口から始まった。
その会話の相手は、愛すべき高校時代の後輩の一人――というかいまだに付き合いのあるのはこの子くらいしかいないわけだが――城廻めぐり。
高校時代は三つ編みのおさげやらでやぼったい見た目をしていた彼女も、大学に入ってからは多少おしゃれをするようにもなり、伸ばした黒髪を下ろし、緩いカールと、少しの化粧で己を着飾っていた。
久々の連絡ということもあり、快諾の意を示したその数日後、早速放課後の総武へと二人で足を運ぶ流れとなった。
「う～ん、まだ卒業したばっかりなのになんだか懐かしいですねぇ。はるさんはどうですか？」
その問いかけに陽乃は、目の前に広がる母校の校舎を遠い眼で眺めた。
「そうだね……私が知らないうちにこの学校が魔王城になっていたとは思わなかったよね……」
「魔王城!?　魔王が住んでるんですか!?」
「うん、ゾーマがいる。あとその魔王の愛人が二人……」
「ゾーマ!?　愛人!?」
いけない、事情を知らないめぐりが分かりやすく混乱している。
元々陽乃がそういう性質の冗談を言うタイプの人間ではないことを知っていることもあってか、
総武校アレフガルド説がめぐりの脳内をかき乱しているのだろう。
少なくとも自分の世話をした後輩には、ましてや生徒会長として学内の風紀に身を粉にして頑張っていた相手にこんな風紀の欠片もない愛憎渦巻くようなドロドロとした真実は知らないでほしい。

それくらいの愛着はあるため、陽乃は真実を伏せた。
「いいのよめぐり。めぐりは何も知らなくていいの。貴女はそのままでいて」
「はるさんが三ページ後に死ぬキャラみたいになってる……」
不吉なことを言うんじゃありません。
しかしまぁ、ここは清く正しい学び舎だ。
いくら何でも、神聖な学び舎であんな頭がおかしいやり取りが発生するとは思えない。
ちょっと比企谷君の顔を見づらいのが玉に瑕だけど、想定できる問題はそれくらいだろう。
大丈夫よ陽乃。貴女は強い。
自分に活とエールを入れて、いつも通りの【雪ノ下陽乃】の仮面を装着する。
「さ、行くわよめぐり」
「はい！　はるさん行きましょう！」
さぁかかってきなさい！
雪乃ちゃんとガハマちゃんを除くその他私に心労を与えない一般人の生徒たち！

◆

意気込んだのはいいものの、果たしてその結果は平凡なもので、校舎へと侵入した二人を迎えたのは、2、3年の生徒たちからの好奇の視線。そして新一年生から寄せられる奇異の眼差しだった。
まずは教師たちの根城でもある職員室へと足を運ぶ。
言わずもがなもともと生徒会として辣腕を振るっていたこの二人の覚えが悪いわけがなく、多くの教師が二人を諸手をあげて歓迎した。
他愛もない話に花を咲かせる事２０分ほど、頃合いを見てその場を離れる。
窓から覗くグラウンドには、多くの運動部の生徒たちが和気藹々と

スポーツに興じており、中には幼馴染でもある葉山隼人の姿も見受けられた。
ニコニコと微笑むその笑顔に陰りはなく、それを見る女子生徒たちが黄色い歓声を上げていることに内心で嘲笑を浮かべる。
ああ、隼人に今比企谷君を中心に渦巻く地獄のような事態を教えてあげたら、どんな顔をするのだろうか。
その上っ面で薄っぺらな笑顔が保てるものなのか、ぜひ見てみたいものだ。
クスリと微笑むその粘着質な悪意が届くわけもなく、視線の先で部活に興じる葉山隼人から視線を外す。
「はるさん？　何か見つけたんですか？」
「ううん、なーんでも。いこ？　次は生徒会でしょ？」
「はい！　一色さん、元気かなぁ」
「あの子は大丈夫でしょ」
そんな会話を繰り広げながら、足を進める。
もし昔の自分に会えるのであれば、ぜひ教えてやりたい。
お前が今進んでる方向が地獄なんだぞ……と。

姉、生徒会長と対峙する。

「陽乃先輩……私どうしたらいいですかね……私、私――」

ぐっと歯を食いしばったのは、目の前の亜麻色の髪を伸ばした少女。

まだあどけない、幼さの残る可愛らしさと、女性的な美しさの混在した、男心をくすぐるだろう少女――一色いろはに間違いなかった。

場所は生徒会室。

そこにあるのは陽乃といろはの姿のみ。

めぐりは他の生徒会メンバー達と共に部屋を出ていってしまったため、完全に取り残される形となった。

言いたいのか、又は言いたくなかったのか。

しかしどちらにせよ我慢はできなかった。

少女は、何とか堪えていたその楔を断ち切るように、自分の罪を告白するように、

たった二人しかいない生徒会室の中で独白した。

「あの、その、私、無理やり処女を奪われちゃいました……」

あぁもう、帰りたい。

憚らずに内心を吐露すれば、陽乃は素直にそう思った。

しかしここで「ごめん帰る！」とはさすがの強心臓を自負する自分でさえ躊躇われた。

なにせ内容が内容だ。

下手を打てば、一人の少女の今後の未来が真っ暗になる可能性がある。

そのため陽乃は緩み切っていた精神を引き締め、思考を高速で回転させる。

処女を奪われた。なるほど一大事だ。

シチュエーションにもよるが、少なくともこの報告がポジティブな話には見えない。

繊細なガラス細工に触れるように、陽乃は口を開いた。

「……うん、相談してくれてありがとうね。一色ちゃん。言いにくい

ことかもしれないけど、その、相手は誰なの？」
その呼びかけに、彼女はためらうようにスカートの裾を強く握りしめた。
その顔に浮かぶのは、隠しきれない不安の色。
それを少しでも和らげるように笑みを浮かべ、陽乃はどんな言葉が飛び出てきてもいいように身構えた。
「相手は……その、先輩、です……」
「フゥン？」
どうやら私は、この学校に住まう大魔王を殺さなければいけないらしい。
ちいかわのウサギのような声を漏らしながら、静かに決意を胸に抱いた。

◆

おいおいおい、●すわアイツ。
ほう、先輩ですか。
上級生からの強姦ですか。
などと、とぼけることはできない。
先輩というのは自分より年上の人間を指す曖昧な形容詞だが、彼女が「先輩」と呼ぶ人間はたった一人のみ。
いうまでもなく――比企谷八幡、その人である。
まさか、そんな、彼が？　ありえない。
そうは思うが、かといって目の前の彼女がウソを吐いている風でもない。
誰よりも嘘という存在が身近だった陽乃だからこそ理解できる、本気の色が彼女からは感じられたのだ。
「えぇと、一色ちゃん。つまり、比企谷君が、一色ちゃんを無理やり襲った……ってことで、いいのかな」
そう聞くと、彼女は一度固く目をつぶり、絞り出すように言う。
「はい……っ！　実質、その認識で間違いないです……！」

「……ん？」
何だ今の。不穏な一言が入ったぞ。
ここ数日間の濃密でいて正気など蒸発しきった日々が経験となり、その経験が「おい、突っ込むのはやめておけ」と強い警鐘を鳴らしていた。
これ以上踏み込むと、底なし沼に足を取られる感覚があった。
しかしもう、ことここまで至って止まる選択肢など存在せず、やや身を引きながら陽乃は問うた。
「一応聞くけど、比企谷君に、犯されたってこと、だよね？」
そう聞くと、彼女は何故か顔を赤らめながらもおずおずと言った。
「はい……雪乃先輩と結衣先輩の先輩とのプレイ報告を全部盗み聞きしてしまったせいで……もう6割くらい先輩とエッチしてしまった感覚です……っ！」

この時手が出なかった事を自分をほめたい。
心の底からそう思った。

「……あの、一色ちゃん。それは、別に犯されてないと思うんだけど」
とりあえず、気を使う必要もないので目の前のナマモノに真正面から正論をぶつけてみた。
良かった。何が良かったかって比企谷君をこんなアホな理由で殺さなくてよかったことだ。
その至極まっとうで一ミリの隙もないド正論はしかしどうやら彼女の心には響かなかったようで、目の前の頭ハッピーセットちゃんは顔を真っ赤に染めたまま言った。
「そうですけど！　でも私は先輩のチ……！　パオンのサイズも一回のプレイでどれくらいするのか、どれくらい出すのか、どこが性感帯なのか、どんな風に攻めるのが好きなのかも全部知ってるんですよ!?
もうこれって8割くらいセックスですよね!?」
「いや0割だよ」
勝手にイマジナリー処女膜を失うんじゃない。あと割合をちょっ

と盛るな。
そんなので処女を失ってたらこの世はとうにディストピアだ。処女厨が毎秒首つって死ぬ。
白けた目で見てしまったのが気にくわなかったのか、目の前の頭のおかしい生徒会長はズビシと指を突き付けた。
「じゃあ陽乃先輩はここまで先輩のセンシティブ情報を聞きまくって、本人に会っても何も感じないんですか!?」
「――っ!!!!」
その問いかけは、まさに青天の霹靂だった。
そう言われると――確かに、と思ってしまったのだ。
少なくともすぐに否定できなかった時点で、論破された形になってしまった。
目の前の頭おかしいのが得意げに言う。
「これから陽乃先輩も思うんですよ。センパイとすれ違うたびに、『凄いつれない態度だけど夜は……』とか、話すたびに『でもベッドの上だと例のアレで……』とか」
「やめてやめてやめてやめて!!!!」
あり得る未来だった。
というか、数十分後の未来の自分の姿で間違いなかった。
嘘。じゃあなに？　私も結局この頭おかしい娘と同じレベルって事!?
それは嫌だ……。それは嫌だ……組み分け帽子に忖度してほしいくらいには嫌だ……。
というか。
「なんで一色ちゃんが、私が比企谷君のセンシティブ情報を知ってることを知ってるの……？」
「え？　それは勿論部室でお二人が得意げに話していたのを聞いていたからですけど……」
「……」
ここ数日間で、目に入れても痛くないと思っていた妹の存在が、急激に疎ましく感じつつある。

一度マジ叱りした方がいいかもなぁ……。
しかしここでブチギレない時点で相当姉バカだという事実を、本人は認識できなかった。

姉、奉仕部に向かう。

「だからそろそろ先輩にはこの子を認知してほしくて……」
「やめなさい。愛おし気な目で腹を撫でるのはやめなさい」
本気で想像妊娠くらいならできそうなほど極まった妊娠演技だった。
これで腹膨らんだりしたら比企谷君の寿命がマッハで減ることは容易に想像できる。
言うと少女がペロッと舌を出して笑った。
「流石に冗談です。まだ中には出されてませんから」
「いやその手は出されてますの体(てい)で話すのをやめてくれない？」
ウソに高低を交えて落としどころを作ろうとするんじゃない。
もう頭おかしいのはお腹いっぱいなんだけど……。
最近、毎週新種のあたおかＪＫと遭遇しているせいで頭痛が酷くなっている気さえする。
「でも実際問題、どうやってあの中に混じるかですよね……結衣先輩を巻き込んで二人で迫るのが今一番確率は高いと思ってるんですけど……」
そこで自分だけで彼氏を奪い取ることより、もう一人別の女がいる状態だとしてもより可能性が高い選択肢を検討する当たり、冗談の思考ではないのが理解できた。
しかし悲しいかな、由比ヶ浜結衣は既に雪ノ下雪乃の手によってドロドロの関係へと引き込まれている。
ここでそれを教えた場合、間違いなく状況のカオスさが進行するだろう。彼の事を考えても、後々に自分に及ぶ被害を考えても陽乃はそのことを口に出すことはできなかった。
「……」
「……それにしても自分の妹から彼氏を寝取ろうとしている話を聞いてるのにはるの先輩って全然反応しないんですね？」
「……!?」
遅れて、自分の突っ込むべきタイミングもややおかしいことになっ

ていることに気が付いてショックを受けた。

◆

すぅぅぅぅぅ……。
無意識に深呼吸を繰り返す。
かつてない緊張感だ。
これまで数多くのドアを一番乗りに開け放ち、場を支配してきた雪ノ下陽乃だが、
事この場所――奉仕部に限っては、そうはならないであろう予感を感じ取っていた。
なぜならこのドアを挟んだ向こう側にいるからだ。この学校きってのモンスターたちが。
さぁ行くぞ……！　その覚悟が決まる前にドアが勝手に開いた。
「あっ、はるさんようやく来たんですね！　遅いから今ちょうど迎えに行こうかと思ってて～びっくりしましたよ～」
「（心肺停止）」
びっくりは完全にこっちのセリフなんですけど？
ともあれ、封印の扉は無情にも開かれてしまった。
意を決して陽乃はドアの向こうに視線を投げた。
そこにいるのはやはり我が妹の雪ノ下雪乃、そしてその友人である由比ヶ浜結衣の姿。
そして一つの違和感、いつもいるはずのもう一人が、見当たらないのだ。
「……あれ、比企谷君は？」
そう聞くと、代わりに答えたのはめぐりだった。
「あ～そうなんですよはるさん。今日は比企谷君、体調崩しちゃってお休みみたいで。会いたかったのに残念」
そのしょんぼりとしためぐりの声に答えるように、文庫本を捲る手を止め、どこか桜色に上気した頬を抑えて妹が言った。
「ふふ、ごめんなさい城廻先輩。昨日は少し――彼を酷使してしまっ

て、その負担が来たのか今日はお休みなんです。ねえ、由比ヶ浜さん」
問いかけに答えるのは、なぜかうっとりとした表情で答えたその横の少女。
「うん……すごい昨日は頑張ってたから、あんなに頑張ったらそうもなるよね……次からは気を付けないと……」
そのやり取りにめぐりはにこっと微笑みいつもの調子で口を開く。
「ふふ、やっぱりなんだかんだで比企谷君は頑張り屋さんなんですね、はるさん！」
「……」
その無邪気極まるめぐりの問いかけに、陽乃は返答をできない。
聞くことができない。あんなにメスの匂い香る表情の二人に対して、ナニを頑張ってたの？　なんて聞こうものならきっととんでもない返答が飛び出すのだろう。私は詳しいんだ…。
そしてなにより、ほんわりとこの状況を楽しむめぐりにこのやりとりの薄皮一枚向こう側に広がる混沌とした残酷な事実に気付いてほしくなかった。
「そう、比企谷君、頑張ったんだね。すごいなぁ。あ～なら私が今日お見舞いにいっちゃおうかなぁ」
話題をそらすようにそう言うと、それに名案とばかりに乗ったのはめぐりだった。
「あ、いいですね！それならお土産もって私もはるさんと一緒についていこうかな！」
ナイスアシスト！　内心でめぐりに向かってサムズアップを送りながら、目の前の少女たちを見ると、彼女らはあははと笑った。
笑ってから――笑ってない目で言った。
「姉さん大丈夫よ。彼の体調はこの後私たちで見に行くから。気にしないで。そこまで迷惑かけられないわ」
「そうですよ城廻先輩。私たちが責任もってヒッキーの事は診てくるので。ほら、ご飯とかもたべさせてあげないとですし」
事実上の、お前らは呼んでいない、という宣言だった。
つまりこの後起きることは明白であり、そう言うことで間違いな

かった…。
流石のめぐりも異様な空気感に気が付いたのか、ぴくっと小さく反応してから、空笑いの声を上げた。
「あ、あはは、そっかそっか！　こんなかわいい同級生二人に看病してもらえるなんて比企谷君は幸せ者だね！」
幸せ者。
その言葉に陽乃は少なくない違和感を覚えた。
しかしまぁ、男的には本望というか、頑張れというか、そんな浅すぎるエールの言葉を内心で浮かべた。
「……それじゃあ私たちもお邪魔したら悪いしそろそろいこっか？」
「そうですね！　はるさん」
めぐりがその助け舟に食いつくような反応速度で返事をしながら奉仕部から離れる。
「あぁそういえば、姉さん」
最後に、ドアに手をかけた自分の背中に、妹から声がかけられた。
「……どうしたのかな、雪乃ちゃん」
「良ければ、なのだけれどまた時間のあるときに相談に乗ってほしいの。今度は、由比ヶ浜さんも一緒に」
「……うん、わかったよ」
良くない。良くないのだが良くないとは言えなかった。
それは見栄で、罪悪感で、姉バカとしての本能的な返事だった。
そのやり取りを最後に、今度こそ部室をあとにする。
「はるさんと雪ノ下さんは仲いいんですね！　私は女兄弟がいないから憧れるなぁ」
横でからりと笑いながらそう宣うめぐりの声を聞きながら、同じくからりというか、カサカサというか、乾燥しきったような声音で陽乃は返事をした。
「あぁ、うん……そうね……」

◆

その夜、一通のメッセージが彼――比企谷八幡の妹、比企谷小町ちゃんから届いた。

こまち：陽乃さん助けてください。

「……」

何が起きているか、理解できない方がおかしいほどにその答えは明白だった。

結果、陽乃の睡眠時間が一時間減った。

比企谷小町の苦悩
姉、義妹の愚痴を聞く。

『陽乃さん……助けてください……今日うちに雪乃さんと結衣さんがきてお兄ちゃんの部屋にこもったと思ったらおにいちゃんのおにいちゃんを二人でおにいちゃんしてて、そしたらおにいちゃんのおにいちゃんからおにいちゃんが……』

「ほんっとにごめんね小町ちゃんほんっとうにごめんね……！」

これぱっかりは陽乃も罪悪感を覚えた。

なにせ二人を開き直らせたのはある意味で自分なわけで、その二次被害者として電話越しに

悲壮な声を上げる小町の姿を想像するだけで陽乃の胸は押しつぶされそうだった。

ただ形容詞をすべておにいちゃんに変換するのは勘弁してほしい。

おにいちゃんのおにいちゃんとは（哲学）

配点：5点

どうしてこうなってしまったのだろう……。

清廉で可愛かった妹と、清純で天真爛漫なその友人が、いつのまにか淫魔と化していた現実を上手く受け止めきれない。

「ちなみに比企谷君は、その、大丈夫……？」

『は、はい。終始眠ってたっぽくて、その間にお二人でその……』

「あぁうん大丈夫だよ。その先は言わなくていいよ。大丈夫」

『まずは雪乃さんと結衣さんがおにいちゃんの足をなめ――』

「いわなくていいよッ!?　いわないで!?」

足!?　なめ!?　そういうものだっけッ!?　付き合ってまだ二か月くらいのカップルってそんなもんだっけッ！

「ていうか、その、小町ちゃんはどこまで見ちゃったの……？」

『……』

「あっ……」

無言という雄弁な返答がすべてを教えてくれた。

コイツなんだかんだで全部見たな。
『いや、これは、そのッ！　義務です！　お兄ちゃんの妹としての！　義務ッ！　ほら、運動の内容によって食事制限とか!?　そう言う感じのでぇ……！』
言いながら、いかに自分が苦しい言い訳をしているのか気が付いたのだろう。
まるでじわじわと首が締まるようにその声の勢いはしぼんでいった。
とはいえ、自分も経験がないわけではない。
そこにとどめを刺すような真似は、少なくとも陽乃にはできなかった。
「そうだよね……妹なら、必要だよね……」
『は、陽乃さん……！』
感極まった声を聴きながらうんうんと大きく頷く。
頷いてから、おずおずと聞いた。
「け、結局どこまでやってたの……？」
勘違いしないでほしい。
決して邪な感情ではない。
そう、これは妹が彼氏に迷惑をかけてないか、その確認なのだ。確認なら仕方ない（護身完了）
『……流石に最後まではしてなくて、代わりばんこで咥えたりこすったりしてました』
「そっかぁ……」
咥えたりこすったりかぁ……。
雪乃ちゃん、お姉ちゃんの言うこと聞いて頑張ってるんだなぁ……。
今の所、自分のアドバイスの全てが裏目に出ている気がするがきっと気のせいだろう。
陽乃は深く考えることをやめた。
『おにいちゃん、一体どうなっちゃうんでしょう……』
どうなっちゃうんだろうね……。

そして現時点ですらどうなってるんだろうね。
姉であるものと妹であるものが、端末越しに沈黙した。
沈黙してから、静かな声で小町が語りだす。
『でもお二人もなんであんなタイミングに……別に嫌いじゃないですけど、あんなやり方じゃ絶対にお兄ちゃんは喜ばないのに……。全然おにいちゃんの事、わかってないなって……。すみません、こんな話……』
それはきっと、彼女が我慢していた本音。
二人には、ましてや兄にはもっと聞かせることのできない、心の奥底にしまったドロリとした感情だった。
「……そうだね。小町ちゃんの言うとおりだと思うよ……」
今は彼女のメンタルを持ち直すことが優先だ。
彼女の抱える憤りを少しでも軽くできるように、同調するように繰り返した。
『そうです、全然わかってない。……やっぱり一番おにいちゃんの事が分かるのは小町なんですよね……』
「……そう、かもね？」
『だって私はずっと昔からお兄ちゃんのお世話もしてきて、そりゃあ大変な時期だってありましたし、喧嘩だってたくさんしましたけど、その分おにいちゃんとは以心伝心というか、ツーカーというか、打てば響くというか、そう言う関係なんです』
「そ、そうだね？」
『そうなんです。だから一番おにいちゃんを理解してあげられるのは私で、でも私は妹だし、ずっとおにいちゃんの傍に居られるわけじゃないから雪乃さんにも結衣さんにもお願いしてみて……でもああやってするなら、最初から小町が一緒にいてあげれば早いんですよね……』
「いやぁそれはどうかなぁ～……？」
彼女の思考と決意が、おかしな方向に走り出しているのを止めるべく、一度待ったをかける。
電話の向こうから聞こえたのは感情の抜け落ちた声だった。

『はるのさんは同じ立場なのに否定するんですかだっておにいちゃんは小町が一番大事でだから小町もお兄ちゃんが大事で本当は私もおにいちゃん離れしたいけど環境がそうさせてくれないなら結局やっぱり小町がおにいちゃんのお世話をするしかないじゃないですか私も本当はそんな風にしたくないのにおにいちゃんがしかたないからずっといるしかないですよね』

「……」

やべぇ。

あまりのヤバさに絶句した。

お前の理解者は俺だけなんだよ理論って兄妹間で発生するものなの？

いや、この二人の兄妹愛が、並大抵のものではない事などとっくに気が付いてはいたが、ここまで醸造されているとまでは流石の観察力でも分からなかった。

『いやですけど、本当に嫌ですけど、でもおにいちゃんには寂しい思いをしてほしくないので、なら私がお世話すればいいですもんね』

「いや、それはちょっと……私的には……何とも言いずらいと言うか……雪乃ちゃん的には悲しいんじゃないかなぁ……」

せめてもの反抗で、そんな言葉を漏らすと、1秒、2秒……と無言の時間が続いてから、「あぁ！」と明るい声が聞こえた。

『もしかしてはるのさん、勘違いしてませんか？　流石にお兄ちゃんと雪乃さんの仲を邪魔したりはしませんよ～』

「あ、そ、そうだったんだ！　そうよね、変な勘違いをしちゃって――」

『大丈夫ですよ。お兄ちゃんの傍に他の誰が居ても――でも一番が私なだけですから』

「……」

『ふぅ、陽乃さんにお話ししたらすっごい楽になりました！　夜分遅くにすみません！　今度お礼しますね！』

「あぁ、うん、きにしないで。それじゃあ、うん、お休み小町ちゃん」

『はいお休みです！　はるのさん！』

テロリン、終話を告げる音を聞いて端末を耳から放す。

「……」

はるのはそのあと、考えるのをやめてベッドに身体を預ける。

今はただ、視界を埋める真っ白な天井の様に頭の中を空っぽにしたかった……。

■■■■■の日記

最近はいろいろなことが起きた。
自分らしくないことが腐るほど起きたし、多分起こした側でもあるのだろう。
そして自分が変わりつつあるようにも思える。
それを恩師に相談したとき、「日記でも書いてみればいい」とアドバイスを受けたため、こうして書き残してみる。
とりあえず二日起きを目処に書いていくつもりだ。
きっと恥ずかしいことも書いていくと思うので、誰にも見られないようにこの日記はしっかり隠しておこう。
6／6（月）
三年生に上がり、周りが妙に浮足立ってきた。
誰もが受験やら就職などを気にしている。
本当なら俺は専業主婦を、などと言いたいところだが、そうもいかなくなった。
なんとも面はゆいが、自慢の彼女ができてしまった。
これまでのようにツンツンとした彼女も嫌いではなかったが、最近の彼女は
あまりにも可愛すぎる。ラノベで出版したら売れること間違いなしだ。
まぁそんな自慢の彼女ができたことで、残念ながら俺の専業主婦の道は絶たれてしまった。
精一杯勉強に精を出し、少しでも彼女に並び立てるよう、嫌いな努力をする時が来てしまったようだ。
面倒くさいことこの上ないが、今は少し心地よくもある。
6／8（水）
最近、彼女が俺を自宅に招く機会がやたらと増えた。
勿論うれしい。うれしくないわけがない。
うれしいはうれしいが、どうしても気恥ずかしい。

そして出てくる料理が全て肉やらニンニクやら、やたらに精が付きそうなメニューなのはなんでなのだろうか。
……いや、まさか、しかし、彼女に限ってそんなことはないだろう。
そして俺が彼氏という立場になったからなのか、やたらと薄着なのだ。
この前はキャミソールとホットパンツという服装で出てきて思わず変な声が出た。
俺は試されてるのだろうか？
いや、しかし俺はまだ学生。彼女を傷物にして責任が取れる立場でもない。
耐えろ俺。お前ならできる。あの化け物に理性の化け物と呼ばれた男だ。
…しかし冗談抜きに泊りなどをしてしまえば抑えられる自信がない。
６／１１（土）
フラグだったのだろうか。俺は昨日、彼女の家に泊まることになった。
つまりそういうことだった。どうしよう。もう死ぬしかない。
なんで俺はあんなことを…。終わった。多分殺される。これがこのまま遺書になる気しかしない。
あの人にだけはばれないように気を付けなければ、俺の命はないだろう。
いやしかしまだ学生の状態で彼女を未亡人にするつもりはない。なんとか頑張らねば。
…それにしてもすごかった。あんなに気持ちがいいとは知らなかった。
そして彼女があんなに乱れるとは思わなかった。
６／１３（月）
なぜか避けられっぱなしの一日だった。
俺が何かしただろうか。
いつもパーソナルスペースが存在しないのではというほどペタペ

タと触ってくる犬みたいな少女が、
なぜだか今日は一回も触れることなく、俺を見るたびに顔を背けて逃げていくように去っていった。
…俺菌がまた流行っているのだろうか？
他人にそうやって笑われても鼻で笑い返せる自信があるが、アイツにそれをされるのは正直ショックかもしれない。
しかも俺が嫌われることで、彼女とアイツの仲が少しでも悪化するのは、忍びない。
少し前までだったら、そんな程度で壊れるくらいならと思っていた俺がこのザマだと、あのイケメン野郎を笑うことはできないだろう。
明日からは、少し頑張って自分から話しかけてみようと思う。
６／１５（水）
結論から言えば、前回のは杞憂だったようだ。
挨拶も普通にでき、普通に会話することができた。
その事実に強く安心している。
部活でも彼女とアイツは仲良く話しているようで、熱中するほど話していたのか、
俺が入ってくる前までずいぶん盛り上がっていた。
しかしなんだろう。
気のせいだとは思うが、アイツから感じる視線が少しだけ、ほんの少しだけ違うものに感じられた。
６／１８（土）
昨日も書くことができなかった。
例のごとく、彼女の家に泊まった。泊まってしまった。
…もう、もしかすると俺は彼女の誘いを断ることができないのかもしれない。
どうにも最近、体が自分の意思を離れるかのように欲望に素直だ。
まるで薬でも盛られているかと思うほどである。
理由はひとえに色を知ってしまったからだろう。
そして問題が発生した。
昨日はなんと俺だけではなくアイツも一緒に泊まっていた。

それだというのに、アイツと彼女が寝ていた寝室で、つまりはアイツが寝ているその横で行為をしてしまったのだ。
普通であれば、忌避するべき行為だというのに、盛りのついた犬のように俺と彼女は求めあってしまった。
今となっては自己嫌悪でいっぱいだ。
こういうことは控えなければならない。

…そんなことをしていたから、俺は彼女ではなく、アイツと行為をしてしまう夢など見てしまうんだ。
６／２１（火）
聞いた話によると、今日は珍しく学校にあの大魔王が来ていたらしい。女神めぐりんを引き連れて。
普段の俺ならばあり得ないが今の俺は心から神に感謝したい気持ちだった。心から体調不良であることを感謝したい。
俺と彼女がそういう関係になってからはまともに挨拶していないのも問題ではあるが、正直今は合わせる顔がない。
一兆歩譲ってもあり得ないが、例えば彼女が俺とのことをあの人に言っていた場合、俺は会ったその瞬間に死ぬだろう。さすがにあり得ないが。
しかし体調管理ができていなかっただけだというのに、かいがいしく世話を焼いてくれる彼女とアイツには感謝してもしきれない。
途中で寝てしまったのが申し訳ないが、おかげで体調はだいぶ回復した。明日には学校に行けるだろう。
…でもこのパンツは、彼女が履き替えさせてくれたのだろうか？
まさかアイツの前ではないよな？　怖くて聞くことができない。
忘れよう。きっとその方がいい気がする。
あと余談だが後輩から「責任取ってくださいね♡」と意味深な連絡が届いた。何言ってんだ？
６／２２（水）
正確には６／２３の朝だが、戒めの意味でも残しておこうと思う。
昨日妹が珍しく「一緒に寝てもいい？」と聞いてきた。

珍しいことだ。
一緒のベッドで寝るなんて妹が中学二年生の頃ぶりかもしれない。
兄としてはうれしいこと以外の何物でもなかったが、夜になって起きれば妹が俺の胸にうずくまるようにして震えて俺の名前を何度も呼んでいた。
頭を殴られたような気持だった。
最近は受験勉強やら彼女やらに付きっ切りになってしまっていた。
あまりにおろそかになっていた。これからは気を付けよう。
腕の中で震える妹を抱きしめると、体を大きく震わせてからそのまま静かに寝息を立てた。
ゆっくり眠ってほしい。